西大寺東西兩塔跡の發掘

發掘の目的

西大寺は奈良時代の大伽藍で、流記資財帳まで傳えられているにも拘らず、當時の遺跡は殆ど殘されておらず、現存する塔跡すら果して東塔の遺跡そのものか否かの確証も得られない程の有様で、伽藍の中軸線すら明らかにし得ない実状であった。今回の發掘の目的は、今は地上に土壇の片鱗すら殘していない傳西塔跡を發掘し、東塔基壇周辺の調査と相まって、出来れば東西兩塔土壇の旧位置をつきつめ、伽藍の中軸線を出し、合わせて條坊の坪の中心を定め、平城京條坊研究の一資料とすることにあった。

發掘の經過

東塔の基壇そのものゝ發掘は昨年十二月に行った。その結果土壇は地山を削崖下げて、層状に築き固め一定の高さに築いた所で礎石をすえ、更に礎石の間に土をつき固めており、築土の下端の地山との境には玉石を入れていることが判ったが、この玉石を入れた築土は基壇の外方にも十数尺拡っているのは何故か疑問を抱かせた。

今年三月にはこの土築の下端の状況から推して、西塔跡でも、同様な結果が現れるならば、例え基壇石等は全く失われているにしても、西塔の存在とその位置を定め得るものと予想し、西塔跡とされている附近一帯を徹底的に發掘することゝした。

最初先ず東塔壇の西方、旧龍池院跡に数條のトレンチを入れたのであるが、旧地表がひどく荒されていて、状況がつかめないので、瓦等の散布している低い部分と、地山の高い部分との境を含む一帯の表土を一面に剥がし、完全に塔土壇建立当初の築土或は地山を露出することゝした。こうして総まくりをしてみると、地表の荒された状況も明

瞭となったので、壇の築土と單なる地山との境を求めて行った所、北よりの部分で遂にその境がつきつめ得られ、それより東方は地山、西方では地山を稍切下げ、その上に玉石をおいてその間を粘土で充塡している狀況が認められた。然し更にその境を掘拡げると、その境界線が斜行するので、築土の平面は八角形になることが判った。よって東塔の周辺でも八角形になるかを檢してみた所、果してそうなり、兩塔一致したのである。但し西塔跡では東塔附近の粘土層であるのと異なり、砂礫層となっている部分が多いので、地山が切下げられて築土されていたのは西北部分にすぎず、壇の境界の明らかにされたのはその部分にとどまり、他は玉石の存在によってその部分が壇内であることが知られる程度に終った。壇の南と西の端は築地外になり、土地が切下げられているので、壇端の究明は不可能であった。

發掘結果

東塔では四周について發掘することが出来るので、八角土築の大きさを測定し得たが、その直径は約八八尺、現塔基壇の一辺の大きさは約五五尺、兩塔の推定中心距離は二九四尺で、奈良時代の尺にして三百尺と考えられる。

西大寺塔については寶龜十一年の資財帳に

塔二基　五重各高十五丈

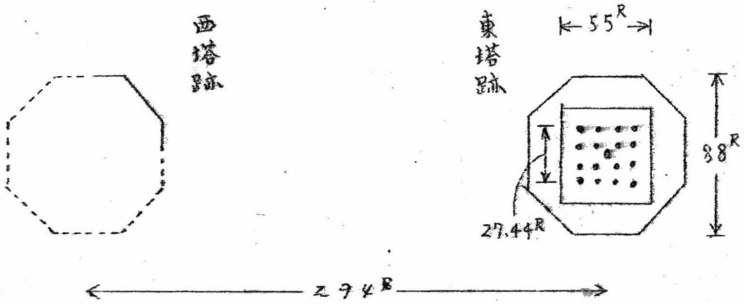
とあるが、現東塔礎石によって知られるその一辺の長さは二七・四四尺であるから、その

高さは十五丈程となる筈で、現存塔跡の規模はこれと一致する。然し護國寺本諸事縁起集に旧流記曰として「有八破七重塔破壊云々」とあり、日本靈異記には藤原永手が「西大寺の八角の塔を四角に成し、七層を五層に減ず、この罪に由りて」地獄に落ちた話が載っていることからすると、最初は八角七重塔を作る計画で工事が進められたことを思わせる。今回発掘の基壇の大さから推定すると、八角七重塔の初層の徑は六十尺程となろうから、この塔が若し建っていたらその高さも三百尺を超えることゝなったであろう。何れにしても、東西相対させ八角七重塔の基壇の存在が実証され、その結果現塔基壇も亦創立當初の位置を保っていることが確証し得られたことは重要で、このようにして伽藍中軸線を明瞭にしようとする所期の目的も完全に達成し得られたのである。

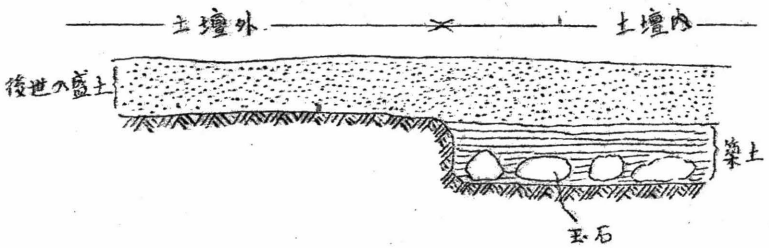
出土遺物

西塔基壇外の旧地表は完全に失われており、遺物も当初の散布状態のまゝには残されていなかったが、新古つきまぜて現在の凹所等に堆積していた。その内特に重要なのは、厚二分五厘位の三彩の陶器断片で、円形のものと角形のものとあり、釘穴もあって、走々地種と俎檜種の木口飾と推定されるもの。(十六片) 塼佛断片二、その他丸瓦々当四十六、平瓦々当六十四、各七八種等が発見されている。尚東塔八角基壇土築周辺中から和銅銭二個を見出した。

奈良國立文化財研究所
(昭三一・四)



發掘遺跡略図



發掘遺跡細部断面図